様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　１日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２００７６
研究課題名（和文）　「リアリティ TV」時代におけるドキュメンタリー表現の変容

研究課題名（英文）　The Possibility of Post Documentary Style

研究代表者
中垣　恒太郎　（NAKAGAKI　KOTARO）
大東文化大学・経済学部・准教授
研究者番号：８０３５０３９６

研究成果の概要（和文）：
擬似ドキュメンタリーとしてのモキュメンタリーの源流を歴史的に遡りつつ、今現在のモキュメンタリーがどのような形で展開されているかを幅広く概観することにより、モキュメンタリー表現の特質に迫ることを目指した。「リアリティ TV」に代表される、今日の「セルフ・カメラ」を主体とした表現方式の流行、「モキュメンタリー」形式への注目により、実存主義的な問題を含む「メディア・リテラシー」に対する再検討を試みた。

研究成果の概要（英文）：
This project explored how documentary and fictional works are changing in the era of reality TV. Even in fictional works, real incidents are often introduced, but not enough to be considered nonfiction works. This tendency shows the intersection of documentary and fiction in the era of reality TV.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008　年度	800,000	240,000	1,040,000
2009　年度	600.000	180,000	780,000
2010　年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：比較文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論 2903
キーワード：
リアリティ TV／モキュメンタリー（疑似ドキュメンタリー）／メディア・リテラシー

１．研究開始当初の背景

「リアリティ TV」に代表される、今日の「セルフ・カメラ」を主体とした表現方式の流行は、ドキュメンタリー表現にはたしてどのような影響を及ぼしうるのか。「モキュメンタリー」（擬似ドキュメンタリー）形式への注目もあわせて、「アイデンティティの探求」という古くて新しい実存主義的な問い、「メ

ディア・リテラシー」の問題、そしてそもそも「ドキュメンタリーとは何か」という根源的な問いに対する再検討の気運が高まっている。「リアリティ TV」の観点から、ドキュメンタリー表現の可能性を再吟味し、「ドキュメンタリー」そのものを再定義する。

２．研究の目的

（１）本研究課題は、現代社会を「リアリティ TV」時代と定義し、20 世紀末から現在にかけて成立した表現作品を現象学的にとり上げ幅広く概観する。さらに、ドキュメンタリー作品が虚構性に対して自覚的であることを強いられ、その一方で「作り物の世界」を現出させるためにドキュメンタリー製作が作中に組み込まれる「モキュメンタリー」表現の可能性について焦点を当てる。

リアリティを追究するためにノン・フィクションではなく「作り物の世界」の方が虚構との対照を一層浮き彫りにさせる意味においても有効であることの逆説性について考察する。とりわけ近年のドキュメンタリー表現において大きな潮流となっている、「セルフ・カメラ」の手法によるアイデンティティ探求の試みは、「リアリティ TV」時代におけるアイデンティティへの揺らぎ、本物と作り物の世界と間の差異の揺らぎを如実に示しているのではないか。『サヴァイバー』(2002～03)、『Black.White.』(2006-　)をはじめとするリアリティ番組においても、観客をも巻き込む形のメタ・フィクション構造により、観客までもが傍観者ではいられない立場を突きつけられることになる。「リアリティ TV」時代にリアリティを追究することの可能性／不可能性に目を向けるとき、21 世紀における新たな表現の可能性が展望されることになるのではないか。

ドキュメンタリーが虚構性を帯びることに自覚的にならざるをえない状況とは逆に、「作り物の世界」である虚構作品における「作り物のリアリティ」を追究する上でどのような現象が現れているのであろうか。『ボラット――栄光なる国家カザフスタンのためのアメリカ文化学習』(*Borat: Cultural Learnings of America for Make Benefit Glorious Nation of Kazakhstan,* 2006）では、作中人物がドキュメンタリー映画や番組を製作しているという設定が施されており、物語世界を構成する要素として登場人物を映す視点の中に製作中のドキュメンタリー映画の映像が挟み込まれるという二重の構造になっている。ドキュメンタリー表現の「虚構性」「恣意性」に対する近年の批評意識が、フィクションの領域の中で「モキュメンタリー」と称される新たな潮流を産み出し、「作り物の世界」と「本物の世界」の間の境界線に漂う要素に鋭く目を向けている。あるいは、ビデオ・アクティヴィストを自称する土屋豊の『PEEP　TV　SHOW』や、2005 年の山形ドキュメンタリー映画祭で注目を集めた、松江哲明の『Identity』などの作品は、ビデオカメラを回し続けるドキュメンタリー映像の中に見え隠れする被写体の「演じている要素」と「素の要素」の両面の間の境界線を探求し続けている。最新鋭の表現者の試みにもできるだけ目を配りたい。

（２）まず、現在のドキュメンタリー表現を分析するために、「リアリティ TV」、「モキュメンタリー」、「セルフ・カメラ」の３つのキーワードを掲げ、その歴史的展開を明らかにしていきたい。

たとえば、「リアリティ TV」を例にとるならば、そもそも「リアリティ TV」とはどのような表現形式であるのだろうか。余計な編集や仕込みを一切排除し、ありのままの映像を伝える、文字通り「リアリティ」を追究した表

現活動である。1990 年代に流行し、21 世紀はじめにかけて数多の類似番組が登場した。「リアリティ TV」は、世界的に同時多発的に流行しているという特徴がある。また、ある面では同時多発的な動きであったと同時に、TV 番組の世界的流通を可能にするグローバルな市場が確立してきたという背景も、この現象を加速させるために大きな役割をはたしていることを指摘することができる。すなわち、ある新しい傾向を持つ「リアリティ TV」番組のフォーマットを転用する権利を公式に売買する市場が成立してきたという背景である。

「リアリティ TV」の歴史によれば、1948 年に放映が開始された、「キャンディット・カメラ」に遡ることができるという説がある。「キャンディッド・カメラ」とはつまり、日本でも流行した、「隠しカメラ」撮影による「ドッキリカメラ」と称される番組形式であるが、「隠しカメラ」を用いた番組制作に欠かせない、カメラなどの機器が軽量化、かつ高性能を有するようになった、1980 年代半ばから 90 年代にかけてのテクノロジーの急激な発達も、「リアリティ TV」の手法がもたらされる背景として大きな役割をはたしている。

2007 年現在では、アメリカにおける「リアリティ TV」番組は、短い時間であまりにも乱立してしまったために、視聴者から飽きられつつあるという状況にあることを認めないわけにはいかないが、表現可能な「リアリティ TV」番組の手法はおおよそ出揃ったとみなすことができるのではないか。便宜上、特徴的な「リアリティ TV」番組について９つのカテゴリーに分類してみた。もちろんこうした分類に関しては異論を持つものであることはまちがいないが、「リアリティ TV」に顕著にあらわれる特徴を分析考察してみたい。

日本の TV ヴァラエティ番組においても、「リアリティ TV」とあえてうたわなくとも取り入れられている要素が多く、ある面では日本の TV 番組の方が先鋭的であることもある。先ほども言及したとおり、同時多発的な現象として「リアリティ TV」的手法と主題が世界中であらわれていること、また、グローバルな市場が確立した中でフォーマットの権利売買が進み、さらに各国文化の中で浸透し、発展を遂げている点を確認することができるのではないか。「世界規模での同時多発的な動き」と「各国文化別の比較」を軸に、「リアリティ TV」とはどのような表現様式であるのかを理論的かつ、映像史の流れの中で位置づけることを目指す。

（３）すでに米国におけるメディア研究においては、「リアリティ TV」をはじめ、「モキュメンタリー」、「セルフ・カメラ」に関しても充分な分析考察がなされており、研究書の数も膨大にある。しかしながら日本においては、社会派ドキュメンタリーにまつわる研究はすでに一定の成果が示されているものの、「リアリティ TV」にまつわる文献は研究書ばかりか、一般書を含めてもほとんど存在していない状況にあり続けている。本研究課題を出版企画への布石として位置づけ、「リアリティ TV」の観点から、ドキュメンタリー表現史を歴史的展開に留意して捉え直すことにより、メディア史、映画史を書き換える構想にも貢献できるのではないか。

また、米国のメディア研究において、現時点では日本の状況が紹介分析される機会はそれほど多くはない。本研究課題の特色として、日本での「リアリティ TV／メディア／ドキュメンタリー」研究への貢献を目指すと同時に、海外学会などでの英語での成果発表を試みることにより、米国での同研究領域への貢献も視野に入れておきたい。「リアリティ

TV」、「モキュメンタリー」、「セルフ・カメラ」は、ある一定の文化が別の文化に対して一方的に影響を及ぼすという形の展開をしていない点に最大の特徴がある。インターネットを含むテクノロジーの発達を背景にした、グローバル化の問題と不可欠なものであり、とりわけ TV ヴァラエティ番組に代表される、TV 文化において日本での「リアリティ TV」への取り組みは世界水準で見ても先鋭的なものであり、また、作り手が「リアリティ TV」の手法を意識していない場合もあるために、国内外ともに状況を一望しにくい。

「リアリティ TV」、「モキュメンタリー」、「セルフ・カメラ」の３つの観点を切り口に、日本国内のみならず、海外での成果発表を目指すことにより、基礎文献の構築を目指す。

３．研究の方法

主要な作品や現象についての各論の執筆を開始する。具体的には「リアリティ TV の歴史的展開と各国別比較」、「モキュメンタリー史」、「「セルフ・カメラの導入がドキュメンタリー映像表現に与える影響について」、「リアリティ TV 時代におけるアイデンティティ探求／実存主義との関連性」などのテーマについて考える上で重要な作品を具体的に採り上げ、精緻な分析を施していきたい。優秀な英文校閲者の協力を仰ぎ、海外への学会発表、論文投稿を含む、英語での成果発表を目指す。アメリカ合衆国の大学や研究機関を訪問し、日本で入手できない作品や最新の研究成果などを参照するために、大学での教育実践の視察などを予定。「ヒストリー・オブ・コンシャスネス学科」という独特の学際研究で有名なカリフォルニア大学サンタクルーズ校や、豊富な資料を持つ同大学バークレー校付設図書館などを訪問する。

４．研究成果

ドキュメンタリーが虚構性を帯びることに自覚的にならざるをえない状況とは逆に、「作り物の世界」である虚構作品における「作り物のリアリティ」を追究する上でどのような現象が現れているのだろうか。本研究では特に「モキュメンタリー」をめぐる動向に注目することにより、近年の虚構と非虚構との境界線に対する意識がドキュメンタリー表現に対してどのような形で表れているのかを具体例に即しつつ検討した。本研究では米国カリフォルニア大学バークレー校メディア・リソース・センター「モキュメンタリー・コレクション」のリストなどを参照し、モキュメンタリー表現の歴史を展望した。このリストは、「架空の人物や団体、虚構の事件や出来事に基づいて作られるドキュメンタリーの表現様式」を取り入れた、広い意味での「モキュメンタリー」映画を扱っている。近年の「モキュメンタリー」の試みについて分析する営みは、同時に映画史を「モキュメンタリー」の視点から再検討することにも繋がってくるのではないか。

擬似ドキュメンタリーとしてのモキュメンタリーの源流を歴史的に遡りつつ、今現在のモキュメンタリーがどのような形で展開されているかを幅広く概観してみることにより、モキュメンタリー表現の特質に迫ることを目指した。「リアリティ TV」に代表される、今日の「セルフ・カメラ」を主体とした表現方式の流行、「モキュメンタリー」（擬似ドキュメンタリー）形式への注目により、「アイデンティティの探求」「文化を見る眼差し」という古くて新しい実存主義的な問い、「メディア・リテラシー」の問題、そしてそもそも「ドキュメンタリーとは何か」という根源的な問いに対する再検討の気運の高まりを改めて確認することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①（共著）中垣恒太郎、五島一美、田辺章、渡邊俊、「ゼロ年代『セカイ系』アニメにおける社会領域と公共圏」『大東文化大学紀要＜人文科学＞』第 49 号（2011 年 3 月）167-86 頁。査読無

②中垣恒太郎「冷戦期「冷戦期アメリカのフィルム・ノワール――『殺人狂時代』におけるブラック・サスペンス・コメディの手法」『文学空間』第７号（2010 年 12 月）46-59 頁。査読無

③中垣恒太郎「海外における日本 SF の受容――筒井康隆を中心に日本における Speculative Fiction の系譜を再構築する」『国際文化表現研究』第６号（2010 年 3 月）127-43 頁。査読有

〔学会発表〕（計 30 件）

①中垣恒太郎“A Comic Warrior in the Cold War: Representations of America in *A King in New York*.” Charlie in the Heartland: International Charlie Chaplin Conference. 2010 年 10 月 29 日（於・米国オハイオ大学）。

②中垣恒太郎“Transitions of Japanese Images in Contemporary Films: Hyper-Consumerism and Going Beyond National Boundaries” Thirteenth International Conference on the Literature of Region and Nation 2010 年 8 月 31 日（於・滋賀医科大学）。

③中垣恒太郎“Locality and Gender / Body / Identity Switching: Ōbayashi Nobuhiko’s Two Versions of Exchange Students and Transitions of Shōjo Images” 2010 年 7 月 31 日（於・ハワイ大学イーストウェストセンター）The Kinema Club X in Hawaii.

④中垣恒太郎「Edwin S. Porter による「アメリカ」映画の発明と世紀転換期アメリカ像の再創造」パネル・セッション「初期アメリカ映画のストラテジー」2010 年 7 月 4 日（於・東京大学駒場キャンパス）表象文化論学会第５回大会。

⑤中垣恒太郎「ポスト・セカイ系としての『東のエデン』――911／世界金融危機「以後」にセカイをいかに語るか」パネル・セッション「ゼロ年代『セカイ系』アニメにおける社会領域と公共圏」2010 年 7 月 3 日（於・駒澤大学）Cultural Typhoon 2010。

⑥中垣恒太郎”The Possibility of Post Documentary Style: A Comparative Analysis of American and Japanese Reality TV.” 2010 年 3 月 18 日（於・米国ロサンゼルス）Cinema and Media Studies Conference。

⑦中垣恒太郎「『リアル』な世界を探して――ジェンダー、地域性の問題から見たポスト・ドキュメンタリー／「リアリティ TV」の状況」パネル・セッション「リアリティ／ローカリティ／ジェンダー――「リアリティ TV」時代における映像メディア表現の変容と（不）可能性」2009 年 7 月 5 日（於・東京外国語大学）Inter-Asia Cultural Typhoon in Tokyo 2009。

⑧中垣恒太郎「『リアリティ TV』時代におけるドキュメンタリー表現の変容――セルフ・カメラによるアイデンティティ探求とモキュメンタリーによる虚構の創出」2009 年 5 月 29 日（於・名古屋大学）第 35 回日本映像学会全国大会。

⑨中垣恒太郎“Imaginary Ideal Girls, Ordinary Girls, or, Odd Girls: Refashioning Shôjo Images in Japanese

Films and Visual Culture.” Panel: Shojo Genso in Japanese Cultural Heritage: Critical Approach to the Neo-Romantic World of Girls. 2008年9月21日（於・イタリア・サレント大学）12th International Conference of the European Association for Japanese Studies。

⑩中垣恒太郎「変容する街の記憶と思索の旅――ツアー・パフォーマンス『サンシャイン62』における『演劇』力」2008年6月29日（於・仙台）「Panel Session: 旅するパフォーマンス～Port Bの試み」Cultural Typhoon 2008 in Sendai: “Inter / Space.”

⑪中垣恒太郎“Imaginary Ideal Girls, Ordinary Girls, or, Odd Girls: Refashioning Shôjo Images in Japanese Films and Visual Culture.” Panel Session: Shôjo Genso: An Interdisciplinary Approach to Contemporary Japanese Girl’s Culture. 2008年6月21日(於･立教大学)The Twelfth Asian Studies Conference Japan.

〔図書〕（計７件）

①中垣恒太郎（共著）亀井俊介監修『マーク・トウェイン文学／文化事典』（彩流社、2010年10月）。

②中垣恒太郎（分担執筆）「寓意としてのマイノリティ、観察者・被迫害者・異人種表象のレトリック」松本昇・西垣内磨留美・山本伸編『バード・イメージ――鳥のアメリカ文学』（金星堂、2010年4月）211-29頁。

③中垣恒太郎（分担執筆）「『ブレンダ・スター』・『ワンダー・ウーマン』――女性文化の黎明期としての1940年代アメリカ」『コミックスを描く女性たち――アメリカの女性アーティストたちの100年』トリナ・ロビンス・大城房美監修（花書院、2009年12月）12-13頁。

④中垣恒太郎（分担執筆）「グローバリゼーション時代における文化交流の可能性――ポピュラー・カルチャーは国家的・文化的交流を変容させうるのか？」杉田米行編『グローバリゼーションとアメリカ・アジア太平洋地域』（大学教育出版、2009年5月）79-108頁。

⑤中垣恒太郎（分担執筆）「『苦難をしのびて』マーク・トウェイン――西部フロンティアというワンダーとの出会い」、「『騾馬とひと』ゾラ・ニール・ハーストン――異文化を見る眼差し」亀井俊介編『アメリカの旅の文学――ワンダーの世界を歩く』（昭和堂、2009年5月）139-52頁、217-31頁。

⑥中垣恒太郎（分担執筆）「『金メッキ時代』に見る近代国家『アメリカ』のアイディオロジー――投機熱・拡張主義・成功神話」那須頼雅、市川博彬、和栗了編『若きマーク・トウェイン――「生の声」から再考』（大阪教育図書、2008年10月）77-97頁。

⑦中垣恒太郎（分担執筆）「アメリカ文化における日本表象の『変遷』――『ロスト・イン・トランスレーション』」「医療問題とポスト9･11における暴力の機能――『ジョンQ』」越智道雄監修、小澤奈美恵・塩谷幸子編『9.11とアメリカ――映画にみる現代社会と文化』（鳳書房、2008年9月）174-96、222-24頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

中垣　恒太郎（NAKAGAKI　KOTARO）
大東文化大学・経済学部・准教授
研究者番号：８０３５０３９６